

「辻が花」再考

国立歴史民俗博物館 澤田 和人

今日、室町時代から桃山時代頃の絞りを主体にした模様染の遺品を、「辻が花」と呼んでいる。この「辻が花」と当時の文献に見える「辻が花」とは、同一視できるという確証を欠いている。遺品と文献の乖離はしばしば注意されてきたことだが、それほど深く当時の「辻が花」の実像は追求されていない。むしろ、「辻が花」と呼ぶ遺品を文献の「辻が花」に擦り合わせる努力が重ねられてきた、と言うべきかも知れない。本発表では、「辻が花」の実像に迫ることをまずは第一の目的とする。

遺品の地質が練緯という絹物である一方、文献では帷子と関わる模様染として「辻が花」が出てくる。ここが問題視されるところとなっているが、帷子の材質についての詳細な研究はこれまでになされていない。そこで、15世紀から17世紀初期までの文献をもとに、当該期間における帷子の材質を検証する。結果として、15世紀の末期までは麻の布であったが、16世紀に入ると木綿など布の種類も増えると同時に生絹という絹物も散見されるようになり、末期ともなると生絹は布と並び立つに至るが、他の絹物が加わるようになるのは17世紀以降である、という推移を示す。

この結果を踏まえて、「三十二番職人歌合」花の部五番に検討を加える。それは、「辻が花」について多くの情報を含み、それゆえ最もよく取り上げられてきた絵巻でありながら、未だ妥当に扱われていないと考えることによる。特に問題とするのは、判詞中の「辻が花」を「絹綾ならぬ布のひとえ衣」とする説明部分である。従来の研究では、この説明が加わる理由を職人という身の貧しさに求めてきた。だが、歌合という営為の性格と、あくまで歌に対する批評であることとを念頭において丁寧に解読すれば、本来ならば詠むに相応しくない純然たる夏物衣料であることを明確に断る必要性に起因することが明らかとなる。そして、帷子の地質の推移と「辻が花」に関する他の文献とを併せ鑑みて、「辻が花」の地質は常に麻であったことを浮かび上がらせ、引いては、類例を傍証に、「辻が花」という名称は単に染色技法を示すにとどまらず、麻の帷子という服飾の種類をも含意していることを指摘したい。

以上の検討から、遺品の「辻が花」は本来の「辻が花」ではないと判断し、次に「辻が花」の実像の構築を試みる。技術の点では、布と絹物との間に見られる相違、及び、それぞれの傾向からして、絞りではなく糊防染の可能性が高いと推測する。模様の様子については、主に「三十二番職人歌合」と『日葡辞書』を手掛かりとして考察を加えるが、模本類しか伝わらない「三十二番職人歌合」は、従来参照されてきたサントリー美術館本の図像が原本から逸脱していることを明示したうえで、より原本に忠実な他本をもととする。

そして最後に、現行の「辻が花」という分類が、矮小な染織・服飾の歴史像をつくりかねない危険性について議論したい。